『國民新報』1940年8月18日

[主張]　八月十日の喜

　二千六百年にり、に三十[]年にる。十五年二月十一日のよりめられたのは、八月十日の十二をつてつた。のがするまでには、まだの日をするであらうが、の五であることは、かのやうである。十がをしなかつたことが、ともへるが、しかし、わづか六ケ月のに、一千二百萬のがをしたことだけでも、まづにすることとへよう。しかも、のがぢられるといふではない。もへども、のをていくらでもはるのであるから、らくは、一二には、が、にふさはしいをることになることゝふ。

　さて、はになものであつて、にのをけかへたといふだけではない。このばしきにあたり、一のをひしてよう。

　一われわれはによつて、七百ににしてゐたをつたのだ。ののは、そのにしても、にしても、にしても、にしても、のそれとのないものであつた。にも、にもはじれをんでゐたからである。それが思へのにより、われらのをれてしまつたのであつて、にの三には、があつた[と]へる。のによつて、このひからされただ。

　二には、われらがとしてきんと[する]いとをによつてしたことである。われわれのしいをげる[、]今[一]度としてのをにし、にりなきとにるであらう。

　三には、よりにつたことだ。われわれはしいのをしたのはわれわれであるが、それをされたのは、のである。ちわれわれは　よりされたまうたをつたことになるのだ。われわれはによつて、われわれをにげまつつたのである。

　四にはのだ。はのであつて、のくのではない。こそのである。なるからたものでも、るのにれば、そののをり、つてそのの、にふのである。はのだ。氏をもつたとのとは、そのにいて一ではない。のによつて、の家も日なになつたわけである。

　とは、してにをすることではない。として、として、しいをするであり、であるのである。